

釈尊の悟りには展開があつた

前 田 恵 學

まえがき

仏教の開祖 釈尊三十五歳、菩提樹下の悟りについて、多くの人は、一度に全開したと思つてゐる。このことは、日本においてだけではなく、アジア諸国の人たちも、そのように考へているようである。少なくとも、私が聞いた韓国・中国・バングラデシュやスリランカの人たちの間では、それまで修行者（菩薩）であつた釈尊が、苦行を共にしていた仲間と分かれ、ウルヴェーラー村の菩提樹の下に一人来て結跏趺坐し、ついに開悟成道した。そしてその悟りは一度に全開し、完全者となつたと考へられてゐる。その後四十五年間、説法伝道をつづけ、八十歳で入滅したとされる。

ここでは、釈尊の悟りにはなお展開があり、少なくとも二度開いたということを、『律蔵大品』(Vinaya Mahāvagga, 1)によつて説明したい。完全な論文にするには、なお漢訳その他の資料が必要であるが、今は取り敢えず、パーリの所伝によ

る。

一

菩提樹下の悟りについて、『律蔵大品』⁽¹⁾には、その冒頭に、その時、ブッダ世尊は、初めて悟りを開いて (paṭhamabhisambuddha)、ウルヴェーラー村、ネーランジャラー河の畔、菩提樹の下にいられた。

と述べてゐる。そこには「最初の現等覺」であることが明言されてゐる。これは地上最初の現等覺と理解されるが、同時に釈尊にとつて第一回の悟りであつたという意味にもとれるはずである。

その悟りの内容は、のちに十二縁起で説明される。縁起説には、九支十支等、いくつかの縁起説があるが、とり敢えず十二縁起による。十二縁起は、要するに無明を根本の原因として、人間の苦が生ずるとする。無明を滅すれば、苦もまた滅するものである。原始仏教の解説には、心解脱・慧

解脱とさらに俱解脱の別を立てているが、無明を滅するのは、「明」すなわち般若によるのであるから、この縁起による解脱は慧解脱にほかならないであろう。⁽²⁾

成道のあと釈尊は、ベナレスに向われる。途中、異教徒のウパカに会われるが、やがて鹿野苑にいたり、五人の仲間すなわち五比丘に最初の説法をせられる。説法の内容は、四諦八正道を中心とする教えである。四諦の教説の中では、苦の原因は濁愛(āgha)とされている。あくなき欲望である。五比丘は、四諦八正道の教えを聞いて、順次に「塵なく汚れを離れた真理を見る眼(dhammacakkhu、法眼)が生じた。」思うに、悟りの最初の段階、預流果を得たのである。この段階では、まだ煩惱は断ぜられていない。欲望が残っているから家に戻つて家の仕事に従事できる。しかし五比丘は志を遂げるために取り敢えずここで受戒して、比丘となる。そこで釈尊は、さらに進んで五蘊の無常・苦・無我の教えを説かれ、その結果、五比丘は貪欲を離れて解脱する。「もろもろの煩惱より心が解脱した」とされる。阿羅漢果を得たのである。四向四果の四段階を経ず、預流果から直ちに阿羅漢果に達しているように見える。阿羅漢になれば、もはや在家生活に戻ることは出来なくなる。この際、「煩惱より心が解脱した」とされているが、これはつまり心解脱を得たのである。

五比丘のあと、心解脱を得て、阿羅漢となったのは、ヤサ・

ヤサの友人四人・ヤサの友人五十人である。ここで阿羅漢は、釈尊を加えて世に六十一人となる。この時、釈尊は、比丘らを集めて「伝道の宣言」を發せられる。これも知られる通りである。

ここで、釈尊の慧解脱に対して、弟子達がいずれも心解脱と見られることは、釈尊と弟子の比丘との間に、それなりに悟りの格差が考えられているのであろう。

二

その後釈尊は、恐らく一人で、ウルヴェーラーのセーナーニガマに向われる。この辺りからまたしても、——菩提樹下と同じく——悪魔パービマントが出現しはじめる。釈尊の心に何らかの動揺があつたことが示唆されている。

いずれにしても釈尊は、間もなくウルヴェーラーで第一回の雨安居を迎えられたようである。この安居は、釈尊にとつて極めて重要な意味をもつものとなる。『律藏大品』⁽³⁾には次のように述べている。

時に世尊は雨期を過ぎてのち、比丘らに告げられた。「比丘らよ、わたしは真の精神集中(ānāpānāsikāra)、真に正しい努力によって、無上の解脱(ānuttara-vimutti)に達し、無上の解脱を実証した。比丘らよ、おんみらもまた真の精神集中、真に正しい努力によって、無上の解脱に達し、無上の解脱を実証せよ。」

ここに言われる「無上の解脱」が、菩提樹下における「最初の現等覺」よりも一段と進んだ境地であることは、疑問の余地がないであろう。すでに阿羅漢となった仏弟子たちに、その悟りをすすめている。それ故私は、ここに「釈尊の悟りには展開があった」、少なくとも二度の展開が認められると言うのである。

二度目の解脱で何が超えられたか。何が超えられねばならなかったであろうか。それについては語られてはいない。しかしウルヴェーラーの菩提樹下の解脱から、最初説法のペナレスへ向われる途中、釈尊はアーजीヴィカ教徒のウパカに会われた。この時ウパカは釈尊が只人ではないとの思いから、釈尊に話しかけた。釈尊はその中で「無師独語」であると答えている。私はこの答えには、何かひつかかるものがある。釈尊はその前に、アーラーラ・カーラーマとウッダカラーマプッタの二師の門をたたいたことがある。それでも無師と言えるかどうか。しかも原始仏教聖典の中には、かれらの主張していた「無所有」とか「非想非々想」とかの言葉が、時に散見せられる。二師の教えは完全には捨て去られてはいないように見える。釈尊の中には、何のこだわりもなかったのであろうか。

かつまた単に無師独悟と言えば、のちの辟支仏（独覺）に存在理由を与えることになる。釈尊が一世界一仏の娑婆世界

の唯一無二の仏であるためには、過去仏（六仏）の系譜を繼承する仏とならねばならない。仏の十号は、かなり古い定型句であつて、そうした系譜をひく正統な仏であることを示す称号である、と私は考えている。この点でも釈尊は、無師独悟を超えなくてはならなかったのである。

解脱には、心解脱・慧解脱に対して俱解脱が立てられる。俱解脱は、心解脱と慧解脱を併せもつ意味があると考えられるが、かつまた慧解脱の人が滅尽定（*nirodha-samapatti*）を得た時の解脱と言われるようである。⁽²⁾ 滅尽定は、釈尊が入滅直前に入定した最高の境地であつて、真ぐそばにいた阿難にも、その境地を窺い知ることの出来なかったものである。阿難は滅尽定を涅槃と取り違い、アヌルッダによつてそれが滅尽定であると訂正されている。

三

釈尊は成道後しばらくは、四諦・八正道・十二縁起や五蘊の説を説いた。しかるに成道後二十年程過ぎて、戒律が必要となつた。⁽³⁾ それまで佛弟子たちの間では、ヒンドウ的な禁戒（*śīla*）によつて教団の秩序が保たれていたかと思われる。教団の拡大と不謹慎な行爲の増加によつて、戒律の制定が必要となつたのである。戒律の数は、釈尊在世中一〇〇ないし一五〇か條になつた。⁽⁶⁾ そして後半生において釈尊は、戒律を

釈尊の悟りには展開があった(前田)

組み込んだ教義の体系を構築した。戒・定・慧の三学、または解脱を加えて四法としたのである。これは言わば、教説の展開であって、釈尊自身の悟りの内容そのものの展開とは言えないであろう。後半生の戒・定・慧の教説は南方上座仏教の根幹となり、前半生の四諦・八正道など戒律拔きの教説は、北方に伝わり、やがて大乘仏教の基盤をなし、改めて大乘戒の成立を見るのである。

因みに、釈尊の悟りについてこのように考える時、後の仏教の理解に何か影響が及ぶであろうか。

すぐに思い浮かぶのは『正信偈』に見られる「不断煩惱得涅槃」の説である。原始仏教に見られる悟りでは、預流果に達した人は、法眼を得ても、煩惱はなお断ぜられていないことを知る。預流からさらに今後の進み方によって、涅槃に近づく道を見出すことが可能となるように思われる。

また『歎異抄』第十六章に「回心ということ、ただひとたびあるべし」という言葉もまた、預流果の場合と関係づけて理解すべきであろう。

- 1 『前田惠學集』第一卷二六五頁。
- 2 同 五八頁。三つの解脱については、藤田宏達氏に意見を徴するところがあった。
- 3 同 二九六頁。

4 前田惠學『原始仏教聖典の成立史研究』四九七頁参照。

5 二十年という年数については、スリランカ・ルフナ大学のM・ナンダワンサ師の示唆を得た。

6 諸部派の戒律を比較して、一致する戒條の数から推定した。

〈キーワード〉 釈尊の悟りの展開——「最初の現等覚」——最初の安居中「無上の解脱」

(文博、文化功勞者)

1. Lodgings of Monks and Nuns in Early Jainism

Kiyoaki OKUDA

We can obtain a rough idea, through the related lines of Schubring's translation of the *Kalpa sūtra*, about what sort of lodgings monks and nuns on a pilgrimage came to find themselves in due to religious constraints, in the time of early Jainism. However, even Schubring's work (*Das Kalpa-sūtra*, Leipzig, 1905) does not clarify how such constraints came to be imposed.

The present paper is an attempt to make this point clear through notes given on the literature.

2. A Study of the View of Buddha in the Smaller *Mahāprajñāpāramitā-sūtra*

Yūgen KATSUZAKI

The present work aims at contributing to the study of the basic view of Buddha in the Smaller *Mahāprajñāpāramitā-sūtras*, and in particular focuses on the view of Śākyamuni Buddha in Early Mahāyāna Buddhism. Consequently, it becomes evident that a new view of Śākyamuni Buddha and Mahāyāna Buddha was established in the Smaller *Mahāprajñāpāramitā-sūtras*.

3. Development of Buddha's Enlightenment

Egaku MAYEDA

At the age of 35, the founder of Buddhism, the Buddha, attained His Enlightenment in *Uruvelā*. This enlightenment is complete enlightenment as thought by many people. But according to *Vinaya Mahāvagga* I, Buddha attained *pathamābhisambuddha* at first, then in the second stage he developed his enlightenment even more. After his first sermon, the Order consisted of 61 *Arahants*, and the Buddha further developed his spiritual development in the first rain retreat. He attained incomparable deliverance (*anuttarā-vimutti*) through mindful concentration (*manasikāra*).

Enlightenment under the Bo-tree is to become free from Ignorance (*avijjā*)

through knowledge (*vijjā*) which must be called emancipation through insight (*paññā-vimutti*). After the first sermon five ascetics, Yasa and his 54 friends, attained enlightenment through being set free from desire (*taṇhā*), which must be called emancipation through mind (*citta-vimutti*). Emancipation under the Bo-tree is the first stage of enlightenment, but emancipation through both sides (*ubhato-vimutti*) is a much higher and deeper enlightenment, which is regarded as *anuttarā-vimutti*.

4. On the Texts of the *Pusa yingluo benye jing*: With a focus on Dunhuang manuscript S.3460

Masanori FUJITANI

Dunhuang Manuscript S.3460, that has been assumed to be the *Pusa yingluo- jing* (T.16, No.656) in various catalogues, is unmistakably the first volume of the *Pusa yingluo benye jing* (T.24, No.1485) compiled in China between the 5th-6th c. A.D. The main distinctive feature of this manuscript is that it has 28 verses on the Twenty-three Vows in the 'xiansheng mingzi-pin' (賢聖名字品) (Chapter 2), whereas other texts have 31 verses on Twenty-Four Vows. This form of the verse is consistent with S.2748, the commentary of this sūtra. Hence, most probably it indicates the original form of this sūtra. Furthermore, when this manuscript was compared with other versions, it turned out to be the closest one to the Fangshan Stone Sūtra.

5. On a Comparison between “Original Enlightenment Thought” and “Tathāgatagarbha Theory”

Jūdō HANANO

Mr. Shiro Matsumoto insisted that the “thought of the matrix of the Tathāgata” (*nyoraizō shisō*) is a non-Buddhist teaching because it is *dhātu-vāda*. Upon receiving Mr. Matsumoto’s theory, Mr. Noriaki Hakamaya opposed the concept of “original enlightenment.”

I responded to Mr. Hakamaya’s opposition, stating that the word *dhātu*, as